

【基盤研究（S）】

人文社会系（人文学）



研究課題名 「肥沃な三日月弧」の外側： 遊牧西アジアの形成史に関する先史考古学的研究

金沢大学・歴史言語文化学系・教授 ふじい すみお
藤井 純夫

研究分野： アジア考古学

キーワード： 西アジア、肥沃な三日月弧、遊牧、ヨルダン、サウジアラビア

【研究の背景・目的】

従来の西アジア考古学は、「テル=遺丘」の考古学であった。従ってそれは、都市・農村の考古学、すなわち「肥沃な三日月弧」内側の考古学であった。当然のことながら、そこには、周辺の遊牧社会は組み込まれていない。その弊害が、狩猟採集→農耕牧畜→都市文明という、一線的な西アジア史の記述である。西アジア考古学がこれまで凡例の置き場としてきた内陸遊牧世界に踏み込み、西アジア史の全体性を回復しなければならない。それはまた、古代文明と地政学的イスラームに二局分化した我々の脆弱な中東理解を根本から鍛え直す作業でもある。

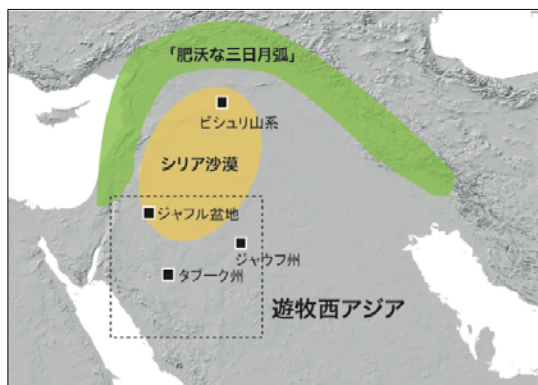


図1 「肥沃な三日月弧」の外側

本研究の目的は、「肥沃な三日月弧 / Fertile crescent」の外側、すなわち遊牧西アジアの形成史を、広域遺跡調査を通して明らかにすることにある。具体的には、①「肥沃な三日月弧」からの派生：短距離移牧の成立過程、②「肥沃な三日月弧」からの離脱：初期遊牧の成立過程、③「肥沃な三日月弧」からの自立：遊牧社会の形成過程、の解明である。遊牧西アジアの形成史を通して、西アジア文明の持つ本来の奥行きを測距し直し、都市・農村世界に偏った従来の西アジア考古学を根底から刷新したい。

【研究の方法】

遊牧西アジアの形成史を解明するには、特定遺跡の継続調査では不十分である。数千年間の動向を見据えた、複数国に跨る、テントで移動しながらの、包括的広域遺跡調査が必要となる。それを、ヨルダン南部のジャフル盆地と、サウジアラビア北部のタブーク・ジャウフ平原で実施する。

調査の対象となるのは、先石器新石器文化 B の移牧拠点から、前期青銅器時代のケルン墓群までの、多種多様な先史遊牧民遺跡である（図2）。方法論的には、シリア沙漠でこれまで構築してきた墓制編年とダム編年が軸となる。

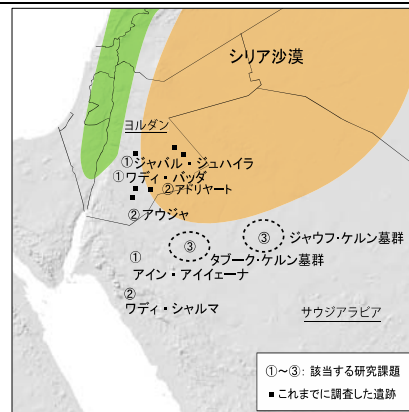


図2 調査対象遺跡群

この二つの編年をベースに、沙漠の中に点在する遺跡群の年代・性格を特定してその分布を押さえ、遊牧社会形成の具体的経緯を明らかにする。

【期待される成果と意義】

一連の調査によって、「肥沃な三日月弧」の内外を見据えた、格段に包括的な西アジア史の記述が可能になる。我が国の西アジア考古学は、日本考古学伝統の精緻な発掘・分析を標榜する一方で、ことパラダイムに関しては依然として追従的であった。本研究は、これに挑戦するものである。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・藤井純夫 (2010) 「沙漠のドメスティケーション - ヨルダン南部ジャフル盆地における遊牧化過程の考古学的研究」 山本紀夫編（国立民族学博物館調査報告 84）『ドメスティケーション - その民族生物学的研究』 519-553 頁。
- ・藤井純夫(2001) 『ムギとヒツジの考古学』 全 344 頁、同成社。

【研究期間と研究経費】

平成 25 年度 - 29 年度
77,300 千円

【ホームページ等】

<http://www.hum.u-tokai.ac.jp/~jswaa/e-expeditions.html>
fujikun@staff.kanazawa-u.ac.jp